

## あの日の頃-8

創立のころ

大森隆實

目黒星美学園小学校に参りましたのは、昭和三十八年でした。

ちょうど十期生が入学の年です。五期生の卒業生を在校生代表の五年の担任として見送り、六・八・十期の一年おきに卒業学年を受け持ちました。

まだ胸あてのあるつりズボンを制服として身にまとっておりやんちゃな大工さんたちの集まりと  
いった男子たちでした。

特に聖母祭や運動会などは中学・高校と一緒に行われていたため、学級担任にとっては、困った、手の焼ける集団でしたが、お姉さん方からは、可愛いわねえ、と呼ばれるもので、時には天使のような、またときにはヘビーギャングのようなジェントルマンたちでした。

その頃から、中学入試もむずかしくなり、放課後補習をするようになりました。通用門の小さな川を渡り、平町を越えて都立大へ歩くのが、子供たちの通学路でした。勿論、環七通りはなく、学芸大も都立大も高架線の駅ではなく踏み切りがありました。

かれらと夕日をみながら一緒に帰ったものです。

東京オリンピックを境に、世の中も非常な発展をなしとげ戦後の一時代が終わったといってもよいのでしょうか。

学校でも二代目のシスターリタ・ポー二校長様の後、再び三代目の校長様としてツスターアンジヨリーナバローネがもどられ、内容の充実をと活気づいてきましたのも丁度この頃です。

「楽しい学校」のタイトルとともに、校報も発刊され、生き生きとした活気のある学校へと行事活動も精選されていきました。

児童、教師ともに、よろこびに満たされた学校にとの願いのもと、田中前教頭先生を講師にお招きしての職員の研修会は、毎月二回位の割合で熱心に行われました。

また、強くたくましい男子を教育していくために、場の設定も求められました。

山中林間の宿舎をお借りして五年男子だけの自炊生活も懐かしい思い出です。

新井、林田の両先生がご飯を炊くのを見るに見かねて、ホームのシスター方が美味しいおみおつけを作ってくださったり、毎夕食は、富士田屋の二階まで、往復したりもしました。往路はマラソンで復路は、湖畔を散歩しながら、現在のホームのある場所まで、子どもたちと仲良く語らいながら時を過ごしたのも良い思い出です。

やがて、男子の錬成会という形に発展し、片品高原や蓼料高原にフィールドを移し、五・六年生を対象に行われるようになりました。

クラブ活動も、その頃から開始されました。

音楽の山中先生、中村先生、体育の林田先生、藤田先生、理科の山の内先生、図工の久田先生、英語の神崎先生と、専科の先生も男の先生方が増えて、野球やサッカーのチームができるまでになりました。

男女混合のクラブ活動によって、学校全体の志気も向上してきたように思えます。

やがて、「楽しい学校から」はじめられた学校の内容の充実も教育共同体づくり、私学の仲間との研修交流とどんどん輪は広がり、今日の学校へと発展いたしました。これらの数々の計画を作成し、実践してきた内で、第四代の校長様であるシスター杉村の働きを、忘れることができません。

常に先を見越して、進められた諸計画は、一時も休むことなく続けられました。私たちに先見(フランス語でプレボアールというらしい)の大切さと常に子どもの側にたって物事を考える姿勢をお教えました。

近年、学校も創立の頃からお働きなされた先生方が定年を迎えられ、創設期、充実期の次のジェネレーションへと移行しつつあります。

五代目の吉田校長様のもと、教職員と力を合わせ、さらに目黒星美学園の発展に努力したいと思えます。

校舎も、三十四年ぶりのお色直しをし、校庭の隅にそびえるメタセコイヤの大木と共に、皆様方のアルマ・マテルとして見守っているように思えます。

卒業生のご活躍とご健康をお祈りいたします。

【同窓会報、第8号・昭和63年12月1日発行・から転載】